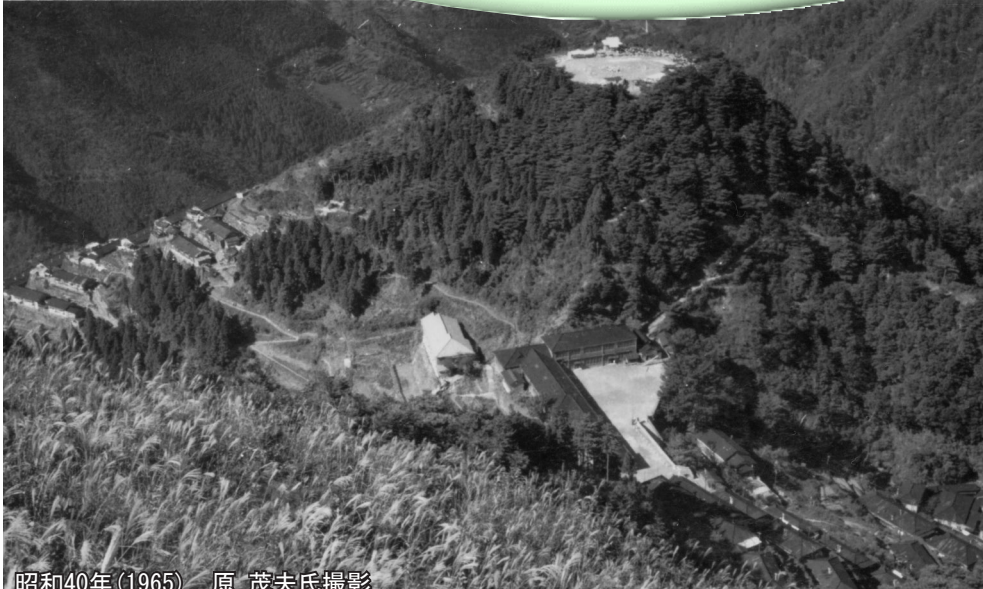




いち もり
一の森

つど
集いの場から生まれた
一つの心



昭和40年(1965) 原 茂夫氏撮影

一の森は、海拔832.6メートルの小高い山で、
どうなる東平を象徴する場所の一つといえる場所です。

一の森の平らな土地は、山であったところを作務(ポランティア)によって人工的にならして作りました。

東平では運動会が一番大きな行事でした。その運動会が行われたのが、この一の森です。一周約80メートルのトラックがあり、そのまわりに観客が座って応援していました。

ソフトボールでは、ホームランが出たらボールが無くなっていたそうです。グラウンドは別子銅山の採鉱本部があっただけあって大変立派なものでした。

かつてのグラウンドには植林がされ、その奥に進んでみると大山積神社の社殿の跡があります。

大山積神社は、大正4年(1915)に旧別子の^{めったまち}目出度町から一の森^{ほうせん}へ奉遷されました。その後、昭和3年に新居浜の^{かわぐちしんでん}川口新田(現:角野新田町)へ奉遷されました。



グラウンド入口の階段の様子



大正10年(1921)撮影
別子銅山記念館所蔵

元旦には、東平のほとんど全ての人々が雪の山道を上がり、初詣に訪れ、多くの人たちでにぎわっていました。大山積神社には土俵もあり、相撲が盛んに行われていました。また、大山積神社のことを、「お山の神様」という意味で親しみを込めて「山神さん」と呼んでいました。

東平坑閉坑の昭和43年までの53年間、東平の人々の心のよりどころとなっていました。

現在の一の森はグラウンドの面影すら見られないようになってしまいました。しかし、東平の人々にとってここはかけがえのない場所でした。

